

教会暦と聖書の流れ

先週の福音で、ナザレでの活動の後、「イエスは付近の村を巡り歩いてお教えになった」(6章6節)とありました。イエスの活動が広がっていくのに伴い、12人の弟子が派遣されることとなります。マルコ福音書では3章で12人が選ばれていました。「イエスが山に登って、これと思う人々を呼び寄せられると、彼らはそばに集まって来た。そこで、十二人を任命し、使徒と名付けられた。彼らを自分のそばに置くため、また、派遣して宣教させ、悪霊を追い出す権能を持たせるためであった」(3章13-15節)。ずっとイエスのそばにいて、イエスのなさることを見てきた弟子たちが、いよいよ派遣されるのがきょうの場面です。

福音のヒント

(1) なぜ「二人ずつ組にして」なのでしょう
うか？ これについてはいろいろな意味が考
えられます。申命記19章15節には、「いかなる
犯罪であれ、およそ人の犯す罪について、一人
の証人によって立証されることはない。二人な
いし三人の証人の証言によって、その事は立証
されねばならない」という規定があります。こ
れは裁判のときに複数の証人がいればその証
言は確かであるということですが、神の国をあ
かしする場合も同様に考えられているのかも



しれません。また、二人が一緒に旅をするならば互いに助け合うことができ、心強いこと
も確かです。さらに言えば、互いに助け合い、愛し合う姿をとおして神の国・神の愛を伝
えることができる、と言えるかもしれません。「互いに愛し合うならば、それによってあ
なたがたがわたしの弟子であることを、皆が知るようになる」(ヨハネ13章35節)。「いま
だかつて神を見た者はいません。わたしたちが互いに愛し合うならば、神はわたしたちの
内にとどまってくださり、神の愛がわたしたちの内ですべて全うされている」(Iヨハネ4章13節)。
わたしたちの中でも同じことが言えるでしょうか？

(2) マタイ10章5-15節やルカ9章3-5節、さらにルカ10章2-12節(72人の派遣)にも弟子
の派遣にあたっての同じような指示がありますが、細部には違いがあります。複数の伝承
に基づいて各福音書が書かれていますが、弟子たちの使命と心構えは、基本的には共通し
ています。「杖(つえ)」は野獣や盗賊から身を守るために用いられることもあり、旅には必
要なものと考えられていました。マタイやルカには杖と履物についても禁じる言葉があり
ますが、マルコのほうが現実的かもしれません。旅をするのに必要最小限のものは許され
るのです。「袋」は食べ物やお金を入れておく袋のようです。「下着は二枚着てはならな
い」は重ね着を禁じているわけですが、これは野宿のときに着る外套のようなものを持っ
ていくな、という指示かもしれません。だとすれば、弟子たちはどこかの家に泊めてもら

うべきだと考えられていることになります(10節参照)。弟子たちには、誰の世話にもならなくてもよいようにすべてを自分で準備しておくことではなく、人と出会い、宿のことも食べ物のことでも人の世話になることが求められている、と言えるでしょう。必ず迎え入れてくれる人がいる、という約束の背景には、もちろん、神がすべてを配慮して下さるから、ということがあるはずです。

わたしたちは、小さいときから「自分のことは自分でしなさい」と教えられてきました。それはそれで大切なことです。しかし、神からの派遣(ミッション)を生きるときには、神への大きな信頼と、人との出会いに対する信頼がもっと大切だということでしょうか。

(3) もちろん、すべての人がイエスの弟子たちを受け入れてくれるとは限りません。受け入れられない場合に「足の裏の埃(ほこり)を払い落とす」というのは絶縁を意味する表現です。使徒言行録13章51節や18章6節では、使徒パウロが同じような仕草をしています。これは「あなたたちのことは神の裁きに任せる」ということであり、自分が恨んだり、自分で復讐しようとはしない、ということだとも言えます。それにしても「絶縁しなさい」というのは、冷たく聞こえるかもしれません。むしろ「救いのメッセージを受け入れない人がいることは仕方ない。その人々をどうにかしようとするよりも、救いのメッセージを必要としている人のところへ向かえ」という意味で受け取ることもできるのではないのでしょうか。弟子の派遣にあたってのイエスのこれらの指示は、文字通り実行すべきものというよりも、「愛する」という唯一の掟のもとで受け取るべきです。

(4) 7節の「汚れた霊に対する権能」は悪霊を追い出す力のことです。12-13節には「十二人は出かけて行って、悔い改めさせるために宣教した。そして、多くの悪霊を追い出し、油を塗って多くの病人をいやした」とありますが、これはイエスがなさってきたことと同じことです。「宣教する」と訳された言葉はギリシア語では「ケリュッソーkerysso」で、直訳すれば「宣(の)べ伝える」です。「何かの教えを宣べる」というよりも、「神の国を宣べ伝える」のです。これこそがイエスの活動の中心でした。「イエスはガリラヤへ行き、神の福音を宣べ伝えて、『時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい』と言われた。」(マルコ1章14-15節)。

イエスは悪霊を追い出し、多くの病人をいやしましたが、「油を塗って」いやしたという記録はありません。ここにはむしろ初代教会の実践が反映しているようです。ヤコブの手紙5章14-15節にこうあります。「あなたがたの中で病気の方は、教会の長老を招いて、主の名によってオリーブ油を塗り、祈ってもらいなさい。信仰に基づく祈りは、病人を救い、主がその人を起き上がらせてくださいます。その人が罪を犯したのであれば、主がゆるしてくださいます。」病者の塗油の秘跡のときに読まれる箇所ですが、初代教会の中でこのような実践のあったことが確かめられます。

復活後のイエスの派遣は全世界に向けて世の終わりまで続く派遣ですが、きょうの箇所の派遣は地理的にも時間的にも限定されたものでした。しかし、ここで弟子たちが派遣され、自分たちも働くことができたという体験は、彼らにとって貴重なものだったでしょう。イエスはこのようにして、少しずつ弟子たちを成長させてくださったと言えるのではないのでしょうか。そしてわたしたちをも……。